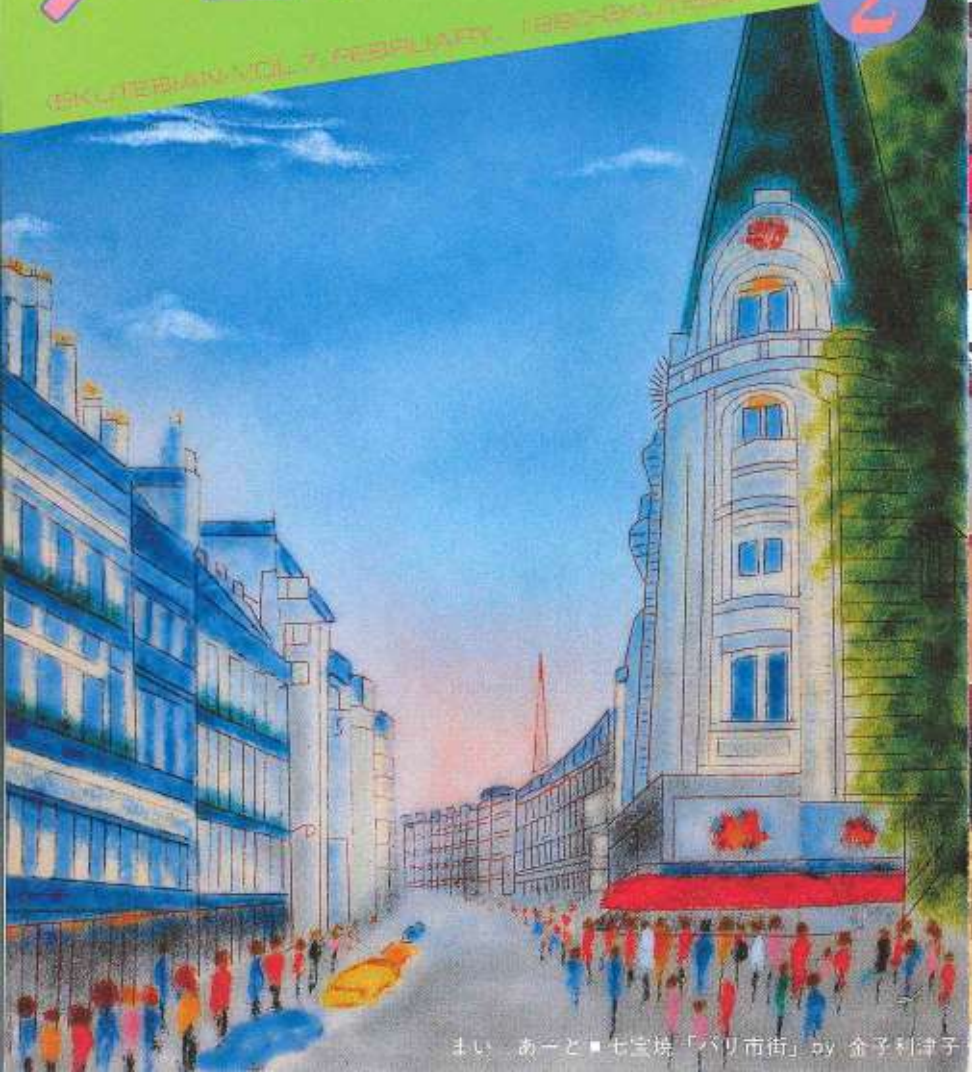
月刊
立川と語ろう　立川に生きよう
えくてびあん
2
まい あーと■七宝焼「パリ市街」by 金子利津子

続・立川名門集

五日市街道編

昨年10月号で「立川名門集」を企画したところ、あるもんですねえ、これ皆んな立川ですかの声しきり。いえ、まだまだあるんです。年もあらたまって、今月は「五日市街道」（砂川方面）編。その歴史、意匠、自然との調和からしてまさに「名門」揃い。門は「家」を伝え「人」を語って尽きない。

鳴島家の門・上砂4丁目／15年前に26本の丸欅を使い、1年掛りで建てられた

尾崎家の門・若葉3丁目／ここに移築されてからでも150年以上になる冠木門

砂川家の門・砂川3丁目／総欅、大正時代の時に身を構え、優美な姿を誇る

吉沢家の門・柏2丁目／立川では数少い長屋門。建て替えの折にも形を大事に残した

宮崎家の門・砂川4丁目／造作されて約250年と伝えられる。いまや石門の奥へ鎮座

砂川家の門・砂川3丁目／戦禍の鉄の供出をのがれ、いまも香る大正ロマン

石川家の門・西砂2丁目／ケヤキをそのまま門にした。生垣との調和が見事

中里家の門・西砂3丁目／"かしぐね"と呼ぶ防風林を門に。手入れが大変

輪一緒、萌ゆ

輪一緒（わっしょい）。というユニークな命名で昨年5月に市民会館で開かれたコンサート。「作る人」と「聴く人」が一体となって会場は熱く燃えたが、今、その第2回（3月25日）への準備が"輪一緒"の声で着々と進められている。

このユニークなコンサートは、"My LIFE & NEW LIFE実行委員会"（実行委員長・野口俊彦さん）によって運営されている。

ステージで歌われる作品の全てが"新曲"で、しかも全部、一般公募によるもの。もちろん、音楽としての完成度が高いということもあるが、自分たちの"思い"がどこまで伝えられるのかというところに焦点が合わされている。

すでに二五〇編の詞が応募され、そのうちの21編が当選、その詞に曲が応募されて、はじめて曲として完成されていく。

昨年5月の第1回ステージでは作詞者、作曲者、演奏者、歌い手と皆んなが舞台のうえに立ち、心よせあって一つの曲に向っている、いや、その曲によって皆んなが「生かされている」光景にしばしばぶつかったものだ。

実行委員会では休日返上で会議や作業をこなしてきた。野口実行委員長を中心に、そのチームワークのよさは抜群。「名簿のうえでは実行委員は60名ぐらいいるんです。いつもこれだけ集まるというわけじゃないですが、それぞれの立場で委員の一端をになっていける、このことが大切だと思うんです」と委員長が語るように「垣根をとっぱらうこと」が「輪一緒」の活動テーマとなっているようだ。

「このコンサートは、15年ほど前に奈良でおこった"わた帽子コンサート"が手がかりとなっているんです。これは身障者が中心になって、全国的な運動にまでひろまったものですが、私たちの"輪一緒"では、障害のある方、ない方を超えて、生きている喜びを歌い合えればと願っているんです」と語るのは輪一緒発足当時から、この活動を推進してきた平石和之さん。熱心にこう語る平石さんは高校生の時から障害者運動にかかわって10年にもなる。自からの経験の中から「輪一緒」の姿勢を築いてきたし、方向としてはこれでヨシとしているようだ。

休日もいとわず準備活動が続く

立川市社会福祉協議会ボランティアセンターの小井詰和也さんも実行委員の一人として中心的な活動をしている。小井詰さんも「誰でもが参加できる広い間口を用意しておきたいですね。実行委員になって頂くのは勿論、当日だけお手伝いして頂く方、お客さんとして聴きに来て下さる方もやはり輪一緒の"輪"の中の一人だと思うんです。それから作詞や作曲、演奏して下さる方、また金銭的な方面から協力して下さる方。みんな私たちの仲間です。」

実行委員が口を揃えるのは「継続力のある活動をしたい」ということ。いま「輪一緒」は3月25日、春一番の出番を待っている。今年も熱い眼差しが届くだろうか。

活動の中核をなす
野口俊彦さん㊧
平石和之さん㊤
小井詰和也さん㊨

えくてびあん エア■メール■ボックス

イタリア←→立川 連載・9 AIR MAIL

イタリアの春は、3月8日の"Festa di Donna"（女性の祭日）に、男性が愛する女性に贈る輝くような黄色の花、ミモザの花束から始まります。この日は街角でたくさんの花束（500円ぐらい）が売られており、街ゆく男性たちはこの花束を買って夕方、家路を急ぎます。僕は、ついうっかりこの花束を買い忘れ、別の日にもっと高価なものを妻に贈ることになってしまいました。

さて、毎月送っていただいている「えくてびあん」、いつも楽しく読ませて頂いています。特に銭湯の特集は、風呂好きの僕にとって、そして今、銭湯のあの大きな湯舟につかることのできない僕にとっては嬉しい反面、ちょっと酷でした。帰国したら、すぐに銭湯にかけ込み、「日本の風呂」を味わうでしょう。こちらの風呂は、いわゆるあの泡の風呂ですが、これはこれでまた気持の良いものです。この泡には薬草などが含まれていて香りも良く、非常に暖まりますし、それにこの泡はシャワーなどで流さずそのまま出られるので楽なのです。でも、やっぱり日本の風呂がいい。

ところで、日本を発つ直前、ちょうどイタリアから2年の留学を終えて帰国した友人が僕に言いました。「イタリアは泥棒以外はみんな良い人だよ」。確かにこちらに来てみて、これはイタリア人をよく言い表わしていました。町を歩けば、目が合っただけで「チャオ」なんて声をかけてくれる人もいるし、道など尋ねようものなら本当に親切に教えてくれます。一度アイスクリーム屋のおじさんに道をきいたら、店をほったらかして、連れていってくれたことがありました。帰りについ義理を感じてアイスクリームを3つも食べてしまいました。道を尋ねると太ります。

お話ししたいことはいろいろありますが、またの機会に。お元気で。

錦町にお住いの声楽家、牧野正人さん（バリトン）と羽根田宏子さん（ソプラノ）は一人息子の寛くんも連れて一年間ミラノに留学。シチリアでのコンクールに夫妻揃って入賞し帰国。現在、活発に演奏活動を展開中。

漢字テスト㊾

空欄に一字挿入を試みよ。

▶前 途 ● 洋

▶急 ● 直 下

完走!! 第11回一〇〇km完走駅伝大会

昨年12月10日(日)若葉町団地内トリムジョギングコースにて、「第11回100km完走駅伝大会」（主催・若葉町陸上部／後援・若葉町体育会）が雲ひとつない晴天のなか行われた。小6の小島花恵さんをトップに、44名の各選手にタスキがわたり無事完走された。地区、家族、友達間の暖かな心のソツウがまたひとつ厚みを増したようだ。

立川トピックス ワタシの街だから

新奥多摩街道沿いにある富士見町団地バス停にこんなものがぶらさがっていた。"住みよい街を……"とホウキとチリトリである。10年程前から、老人クラブの万寿美会が奉仕活動の一環として始めたもの。会長の谷沢さん(68)曰く「マナーがよくないが、コツコツとね」と。

？立川クイズ

立川の駅前を発着するバスの数の多いこと、ラッシュ時などは広場がバスで埋ってしまうほど。

でも、その昔、立川駅が出来てからも、人力車や馬車が人々の"足"だった時代は結構長かったのです。では、立川の街に初めてバスが走ったのは、いつ頃だったでしょうか。

❶明治の終り頃❷大正中頃❸昭和のはじめ頃

【1月号の答】❶

立川には大木が多いようで、幹まわり3m以上の木は78本もあるそうです。中でも柴崎町一丁目の八幡神社跡の大ケヤキは幹まわりが6m余もあります。建長4（1252）年、立河氏により八幡神社が創建されましたが、当時参道に植えられたものと伝えられ、市の天然記念物に指定されています。700年を経て今なお見事に葉を繁らせているこのケヤキ、もっともっと長生きしてほしいですね。

真如苑だより

寒い日が続きます、皆さまいかがお過ごしでしょうか。厳寒のなかに早くも「春」が生れる気配がみえます真如苑へ、今月もどうぞ。

■日時　2月15日(木)
午後3時〜5時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■立川市民（成人）に限らせて頂きます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へ。

表紙は語る

まい あーと■七宝焼「パリ市街」by 金子利津子

「そうね。"何年程七宝焼をやっていらっしゃいますか"なんてあらたまって聞かれると恥ずかしいですが……十四・五年になりますかね」と、ずいぶん懐かしそうに話してくださった栄町4丁目にお住いの金子利津子さん。「やり始めは、立川市で発行している"広報たちかわ"を見まして、中央公民館で『中央七宝友の会』（指導・大国廣先生）というサークルがあり、やってみたいな、というささやかな気持ちから行き出しました。やっていくうちに、こころよい緊張感が楽しくなってくるんですよ。焼きあがるまで思っていたイメージどおりのものが出来るかどうか緊張するんですよ。出来あがってきて"ぱっ"と一息するのがたまりませんね」と金子さん。ちょっとした心のざわめきがこんなにまで喜びあふれわたってくるとは、やっぱり感動というのが大切のようです、ものづくりには。

工房から

●砂川町3丁目の砂川淳美さん宅の門は、ご覧のように立派なものですが、戦時下、鉄の供出の運命は逃れられないご時勢。それが何かの手違いで残り、今日まで生き延びたと聞きました。家に「歴史あり」です。●輪一緒を「わっしょい」と読ませるあたり、なかなかのセンス。実行委員のひとり平石和之さんは、ボランティア活動は自分にとって、海外旅行をしたりスキーに行くのと同様、「青春メニュー」のひとつでシンドイ事している気は微塵もないと微笑む、その充実した笑顔。●立春にはコロンブスのように尻を割らなくても卵は立ちます。そう聞いたら一度はやってみる、これが「えくてびあん精神」というものです。●白魚の白きが中に えくてびあん。

（編集）石塚敦美　小川知子　神山清子　隠川理　山田恵子　中村紘里　半沢正弘　原田悦子
（写真）天野武男　板橋一明　吉田義治　スタジオ269　枝川一巳　本多修

漢字テスト答え

前途洋洋（ぜんとようよう）
将来が大きく開けていて、希望に満ちている様子。前程万里とも。

急転直下（きゅうてんちょっか）
事情が突然かわって事のきまりが急に片付くことをいう。

月刊えくてびあん　第67号
平成二年二月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市富士見町2-20-15
パークビューハイツ501　〒190
電話　〇四二五(28)〇〇八二
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　㈱大廣社

第8回 我家は3代目

老舗といい暖簾の重みという。それも3代つづけば語り尽くせない物語があろう。この街にも沈黙して静かなる物語のかずかずがそこここに隠されている。

七転び八起きを願って5代

村野ダルマ屋（西砂6丁目）

砂川の地でダルマを作って5代。現在、立川ではここ一軒だけの老舗。幼い頃からダルマ作りを手伝っていた主人、4代目。『正月は、いつも子供たちだけで留守番だった。親たちはあちこちの寺や神社の市へ行ってしまうから』。20才過ぎて本格的に始め、以来30余年。会社をやめ後を継いだ5代目と共に初代以来の〃ダルマ〃を守る。

「ずっと続いて来た家業だからごく自然に継いだ」と語るお二人。

初代以来、同じ〃顔〃を守って来たというダルマ

右から村野イチ子さん、昌利さん、晴佳ちゃん、瑞恵さん、昭次さん、真衣子ちゃん、ツネさん、小林シゲ子さん

型に赤く色をつけるのは10月半ば過ぎ、「作るのも、売るのも寒いねえ」と笑う昭次さん。毎年3000個は作るというダルマが、家族みんなの共同作業で一つ一つ丁寧に仕上げられてゆく。完成したダルマに囲まれて。